

---

# 『魔王と勇者』のその前は……

汀 一穂

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

『魔王と勇者』のその前は……

### 【Nコード】

N6051X

### 【作者名】

汀一穂

### 【あらすじ】

「魔王と勇者と彼らのその後」に至る前のお話。

勇者の呪われた当時の話や魔王が苦手としたものの話しなど、過去の出来事を綴ったお話です。

(本編でそこまでなかなかたどり着けないため、ここでフライング投稿します)

## 登場人物（前書き）

現在登場していないのも投入して  
ます。  
とりあえず投稿して  
ます。  
おいおい追加して  
いきます。

## 登場人物

### 勇者

名前：ジエイル（偽名）

年齢：74歳（笑）（外見年齢、24、5歳ぐらい）

詳細：本名はみて……じゃなくて、あまりにも有名すぎて偽名しか明かせない状況の、ある意味可哀相な人。

女神の祝福を受けたせいで、魔王討伐なんて旅に強制的に駆り出された。

（女神が祝福を与えたと言われているが、もともと持っていた力を開放されただけ、という噂もある。真相は女神だけが知っている）

魔王を倒した数年後、通りすがりの人物に（八つ当たりで）呪われ現在も若々しい姿を保ったまま。そのせいで、平凡で平穩無事な生活を望んでいたはずなのに、現在はその妄想から大きく外れた生活に。勇者をやってる時点で最初から平凡は無理な話だと思う。

娘の中身が神の陰謀の下魔王になったせい（おかげ？）で、ようやく本当の子育てが始まった。

勇者の長い髪は、外見が変化しないので何らかの変化を持たせようと思った果てのもの。長くなった髪をみて、年月の変化を感じ取っている。

### 魔王

名前：アリーシア

年齢：3歳

詳細：元魔王。神のうっかりという陰謀の下、勇者の13番目の娘へと転生した。

キレた勇者は怖い、と転生初日からインプットされた(笑)

魔王時の享年、1000歳オーバー。だが魔王時代はその年齢の半分以下ぐらい。初期は小動物達に力を分け与えていたらしい。そんなこんなしているうちに、気付けば魔王に祭り上げられていた。

魔王になつてから後、最後の辺りでは責任を全て放棄したただの道具として玉座に縛り付けられていた。だが本気を出せばその状況から脱出することも可能だったのに、それをしなかった。

勇者を見出してからは、早々に成長をしてもらおうと色々計画を立て、様子を覗き見したり報告してもらったりと、ちょっと危ない人だった。その成長様子に一喜一憂していた、なんて裏話も。

#### 変態

名前：ガシユガル

詳細：勇者の名前(偽名)をなかなか覚えられない人。

魔王が倒された後も幾度と無く勇者の下を訪れ、喧嘩を売っている。(大体5年周期ぐらいで)

#### メティア

名前：メティレシテイカ・ゼンヴォーグ

詳細：魔王の裏の元側近。

未だ本編未登場のため詳細はこのぐらいで。

(この人本編で出てくるかどうかがちょっと怪しいかも。過去の話では登場予定)

#### リヴィツ

名前：リヴィツ・エイワーク

詳細：オカマさん。勇者の旅の途中で知り合った人物。

現在相当なお年のはずなのに、その外見は若々しさを保ったまま。本人いわく「そりゃエイジングケアには相当気を使ってるから当然よ」との事。様々な著書を出版している有名人。

#### エルド

詳細：勇者の友人。一時期旅の仲間だった(?)

呪われた直後あたりに報告(愚痴り)に行った最初の相手。

#### リガルデ

名前：リガルデ・ゾイスダーク

詳細：現在の魔王。先代の魔王を呪った人物でもある。

#### メルタ＝シエーン

名前：メルティエリア

詳細：シエーンとは神の尊称。創造神。正式名称はもっと長いらしいが、そんなに詳しく出す予定は無いので未定でok。登場するたびに姿が違っらしい。

#### アリア＝シエーン

詳細：春の女神。正式名称は(略)で。今後の予定で登場予定はまったく無い存在。

勇者を呪った人物に関しての報告書（笑）

この人に関しては、本当に通りすがり。今後出てくる予定はまったく無い。外見をちょこつと出してみたけど……うーん（悩）

詳細としては、当初この作品に出る予定のまったく無かった人。

この人物は、この作品の時にはすでに人外魔境な人に仕上がっている。が、色々と制約が付いているため力を振るうことは出来るのだが、あまり使わないようにしている。勇者を倒したのは、ほぼこの人自身の實力（笑）

補足。別作品の主要登場人物だったのだが、あまりにも設定が懲りすぎて複雑になり、ついでに自分の文章力不足のために日の目を見る予定が無いせいで、ならば、とばかりにちゃっかり出しちゃった人。

本当に思い入れが強すぎて、たぶん一生日の目を見ない気がしてならない。

まとめ、と称した作者のぼやき。

この作品を書き始めた当初は、名前も外見すら決まっていなかった主要人物二人組み。

書き続けていくにつれぼつぼつ登場人物の名前も色々と決まっていたにも関わらず、なかなか決まらない上に、最終的には偽名となった勇者。魔王の方は適当につけてみた。

（ちなみに、この登場人物紹介を書くとき、勇者の偽名すら私は間違えていた（笑））

未だ外見の表記が無いのは微妙に定まっていなからという話が無きにも非ず。

勇者は当初の予定ではある意味可哀相な人なのは変わりなかったが、何故これほどまでに変人になったのが謎。なぜにこうも面白い人間に仕上がったのだろうと首をひねる日々。

思いつきという名の原動力で書き始め、無謀な挑戦と思いつつも無鉄砲さを発揮し、無計画という計画の下書き続けているのだが、  
一体どれがいけなかったのだろう（笑）

ぼちぼち頑張っていけます！



平和な日常を望んだら……（前書き）

……本編が行き詰った

楽しんでいただけたら何よりです

最終改訂 1 / 5

平和な日常を望んだら……

この間、久しぶりに勇者がやってきた。

あの旅が終わってから幸せな家庭を築いたと仲間の一人から聞いていた。子供も生まれたと聞く。

そんな人間が何故ここにやってきているのかと疑問であったが、それ以上に驚くことがあった。

幸せのはずの人間が、一目見て分かるほど黒いオーラを背負ってやってきたからだ。

旅の中でもこれほどまでに落ち込んだ姿を見た事は無い。

何時に無い落ち込みように俺は驚いた。

そして聞いたんだ。

一体何があったんだ、と。

話を聞いて驚いた。

魔王を倒したら、平凡で平和な日常に戻るんだ。

そう言っただけ旅を続けていた勇者に降りかかった災難に、俺は思わ  
ずありえないとつぶやいた。

俺の名前はエルド。一時期勇者と共に旅をした仲間である。

なあ、エルド。聞いてくれ。

あの旅の後、俺はミレアと一緒にになったんだ。これは知っているだろうな。

子供も生まれた。かわいい男の子なんだ。

いや、女の子がいいな、とかバカを言っていた過去は忘れてくれ。だから、女の子だった場合べたに甘やかすとかそんな過去の話を掘り返さないでくれ。

ああ、いや。話が逸れた。

そんなこんなで暮らしていたんだが、時折腕を見込んで色々頼まれることがある。街道を襲っている魔獣の退治とかを。

あの日もそんな依頼を受けて村から出かけたんだ。

その出かけた先で、不思議な少年に出会った。

その街道に突然現れたその少年は、どこか不思議な気配を纏っていたんだ。

彼は突然聞いてきた。

魔王を倒したお前は、この後何を望むんだ。

俺はこの質問に、いつものように答えたんだ。

身の丈にあった平凡で平和な日常を望むと。無理やり託された魔王討伐という使命は果たした。これからはこんな日常から脱し、最初のころにあった平凡な日常を取り戻し、そしてどこかの静かな村で妻を娶って老いて死んでいく。これからはこんな人生を送るんだ。

お前達にもそう言っていたからこの質問の答えは簡単だった。

そう答えた俺に彼は言った。

それはいい望みだね。

彼はその言葉には、心のそこから同意してくれていた。

皆からは色々と言われたけれど、そんな普通に同意してくれる相手はあまりいなかったから嬉しかったのもあった。

その望みも半分くらいは叶っていたからそれも言ったんだ。だからこれ以上は望みは無い、と。

はっはっは。だがどうやらこれがまずかったらしい。それまでは良かったんだが、そういった後、ヤツの気配が変わったんだよ。

何て素敵で平凡な小憎たらしい望みなんだ、って。そんな自分を弁えた返答を素直に返してくれた君にとっておきのプレゼントをあげよう、と裏がありそうな満面の笑みで言われたときによくやく分かった。

どうやらとてつもない地雷を踏んだようだ、と。

何故か背中に流れる汗がヒヤリと感じられた。

激しく嫌な予感しか浮かばない。

目の前に立っているのは、見た感じどこまでも普通の少年だった。だがその気配は普通の少年などではなく、とてつもなく強大な力を持った猛獣と敵対しているようだった。

だがこんな少年に怯えたなんて知られたら……と考えもしたが、それ以上に本能が言っていた。

即座に逃げろ、と。

そう。俺はその本能に従い、即座に逃げればあんな事にはならなかった……と思う。

ヤツがすんなりと見逃してくれたら、だが。

どう足掻いたところで結局は同じ結末を迎えたのしれないが、それでも何かが違っていたと思う。いや、思いたい。

で、結局どうなったかと言つと……

俺は逃げ切れるはず無く　　呪われた。

もはや笑い話と言えるだろう。

ぼろぼろにされた拳句、呪われたんだからな。

本当に笑った場合は即座に排除してやるが。

次に出会つたらヤツを討つ事に俺は一切躊躇ったりはしない。次に会うときこそヤツの最後だ。

そう思っていたのに、ヤツは言ったんだ。

ようやく最後の役目は終わったから、これで心置きなくここから立ち去れる。

はつきり言つて意味が分からなかった。

何を言っているんだ、と聞けば、ヤツはこれからこの世界から立ち去ると言つたんだ。

さらに意味が分からなかった。

この世界から、という言葉信じらるなら他にも世界があるのか。そう問いかけたら「さてね」と笑いやがったんだ。畜生！！

さて、君には不老の呪いをプレゼントしてあげたよ。これから君が何を成し、この世界に何をもたらすのか。それは自由だ。自由に生きてくれていい。平凡を望む君に非凡な日常をプレゼントだ。

愕然としたよ。

その究極の嫌がらせのような呪いは一体何なんだ。いつそ野垂れ死にでも魔獣にうつかりとかでも自殺でもどうとでもなるぞ、と考えているとヤツはその考えを読んだかのようにさらに言った。

もしわざと死のうと考えて実行した場合、君には更なるプレゼントをあげよう。それはね、不死の呪いさ。

はつきり言っつて、生きた地獄に突き落とされた気分だった。うきうきしたように言ったヤツをはつきり言っつて叩きのめしたい気分だったが、叩きのめされていたのは俺の方だった。

……動かない体が、あれほどまでに恨めしく感じた事は無かったよ。

その呪いは解き方があるが……教えてやらないよ。

教える！と言っつてもヤツはそれ以上何も答えようとしなかった。ただ一言、時が来れば解けるだろうさ、と訳の分からないことを言っつていたが。

その後ヤツは笑いながら、非凡な人生を満喫してくれ、と言っつてその姿は溶けるようにして消えたんだ。

その消える姿を見て、二重の意味で驚いた。

そんな風に消えていく魔法はこの世界には存在しないし、その上変化したヤツの姿だ。後姿しか見えなかったが、それまで黒髪だったヤツの髪色が青銀髪に変化していたから。

そうしてヤツは消え去った。

痕跡を何一つ残さずに。

ああ。お前も知っつてのとおり魔法を使っつた後、必ず何らかの痕跡

が残るだろ。だがそんな痕跡は一切残っていないかったんだ。

文字通り、消え去ったんだよ。気配何一つ残さずに……この世界から。

君は、果てに何を掴むのだろうか

最後に、そんな言葉が風に乗って聞こえた気がした。

その話を聞いた直後はあまりの内容に、話しの全てを信じられなかった。

それまで女神の祝福のおかげか年を取りにくかったが、それでも一応成長をしていた勇者を知っている。それ以上に勇者を叩きのめす事の出来る存在がいたこと事態、信じられなかった。

だが、しばらくして再び訪れた勇者の姿を見て驚いた。

5年も経ったのに、外見が一切変化をしていないのだ。

髪は伸びる。ひげもまた然り。

だがその姿に『老い』というものが訪れる事は決して無かった。

不老の呪いという、平凡な日常を望んでいた男に降りかかった非情な現実。

そしてその後、彼はどうなったのか。

あまりの結末に勇者はその後数年、荒れた生活を送る事になる。その後の数年はあまりにもひどかった、というか何というか……その……、一言で言えば、凄まじかった。あまり突っ込まない方がいい事を色々としていた。

……気持ちは痛いほど分かるが、それはやりすぎと思ったのは仲間達の共通の意見だ。

魔王を倒してから約20年後

勇者は名を変え、偽りの情報を世間に植え込み……。そうした苦勞の末、今ではかつて世界を救った勇者の姿は、元の姿からは想像もつかない人物が出来上がっていた。

こうして世間には、現実の勇者とはかけ離れた存在が広く知れ渡る事となっていた。



## 勇者の黒いページ（前書き）

その名の通り勇者の黒歴史。

魔王討伐後のさらに災難後の出来事。

## 勇者の黒いページ

神の祝福を受けた。

そして魔王を討つほどの強大な力を得た。

そのおまけとして、年を取りにくくなった。

その後苦難の末、魔王を倒し平和な日常を取り戻した。

子供も生まれ、順風満帆の老後生活の夢を描いて暮らしている。

そう思っていた矢先に呪われた。

年を取らない。

あまりにもひどい結果だった。

俺は平穏な生活が望みだった。その望みだけを胸に、必死になつて旅を続けた。

ただそれだけだった。

だから魔王を倒した後、自分が勇者であるという事を隠して生きようとした。肩書きなんてものを望んで旅を続けていたわけでは無  
いからだ。地位なんてものも必要ないと思っていた。

呪われた数年後、同じ場所で暮らし続けていると、次第に村人達の視線が変なものを見るような物へと変わっていく。外見が初めて見たころから一切変化をしないからだ。

次第に俺が何者かと疑惑を抱くようになる。

気付けば、同じ場所で暮らし続ける事が不可能になっていた。

人は人に持ち得ないものを望む。

力然り、寿命然り。どこで聞きつけたのか、俺が不老と知った者達に命を狙われるようになった。その血肉を食らえば、同じ加護を得られると信じた一部の馬鹿者どもがいたからだ。即座に振り返りにしたのは当然の事だ。

その後数年は荒れた暮らしをしていた。

魔物の残党狩りと称した八つ当たり。盗賊の掃討と称した憂さ晴らし。等等。

しばらくすると当り散らす対象が減ってしまった。

周囲を見渡してもゴロゴロしていたはずの対象が、今では身を隠すようになったからだ。

次に選んだのが旅の途中で出会った、色々と恨み連なる相手。魔王討伐に向かう途中で散々迷惑を掛けられた相手だったので、心置きなく罫を仕掛けて嵌める日々。

やつらは各国の中央の人間に目をつけられていたようなやつらだったが、問題は無い。ついでに言えば能力を最大限に有効利用したから証拠は一切残っていない。

王国的にも内部の毒を取り除けて万歳だろうし、俺的にも溜飲が下がって万々歳だった。

そんなちよつとしたイベントを楽しんでいる途中で地形を一部変えたりしたのは、手っ取り早く問題を解決するためだった。

依頼の内容の煩雑さにイラついていた訳ではない。決して八つ当たりとかそんなものでもない。

その証拠に、きちんとその山にあった貴重な薬草を崖下に植え替えておいたから問題はまったく無い。力をフル活用したので生育環境の問題も一切起きていない。時折、周囲をちよつとした風が吹き荒れたりとかするぐらいの問題だ。

その草を持ち込んで一財産築いたなんて事も、あっても言わないぞ。

さらに数年後。

とある学校の教科書に、この時期の世界状況はこう記された。

『純白の社会』と。

事の起こりは、魔王が倒されてから数年後に端を発する。

まず最初に、大きな騒動を起こして世間を騒がせていた魔物や魔獣が何時の間にか討伐され尽くされていた。

その後、世間を騒がしていた夜盗や盗賊といった賊のほとんどが一掃されていた。

この事に世間の人々は感謝の言葉を吐くより、いい知れない恐怖に震え上がるほうが多かった。なぜなら、その賊を討伐した人物が一切姿を見せなかったからだ。

そんな討伐された賊の中には幾人かの生き残りは存在したのだが、皆が皆、うわごとのように「闇が、闇が迫ってくる」とか「ヒイイ、ゆ、許してくれえ」など半ば錯乱した状態で見つかっていた。

このことも世間がこの賊を討伐した人物に、素直に感謝の念を抱くことを阻んでいた。

そんな世間が別の意味で騒然としていたとき、別の場所で事件はまたも起こっていた。

最初の事件は、某王国の朝議でのこと。

その書類は気付けば用意されていたのである。

書類の内容を読み進めるうちに、皆が揃って顔を青ざめさせたそうだった。

それも当然の事であろう。上層部の不正を告発する文書だったからだ。その上、内容も恐ろしいほどまでに事細かく記されているのである。

これらの書類の裏を取った王は、その書類の人物を処断したのである。

そしてその被害は拡大の一途をたどり、最終的には大国一国を含めた計4国にまで及んだそうだった。国数は少ないように感じるかも知

れないが、その書類に残された人数は二桁を超えたそうだった。

不正を行っていたと噂された人物は気付けば証拠の書類を目の前に突きつけられ、次々と処断されていった。他にも不正がまったく知られていなかったはずの人物でさえ、見事なまでに証拠書類をまとめて用意されていたそうだった。

この事実には、さすがに不正を行っていないものですら恐怖を覚えたといい。

この事件は先の賊の一件も相まって、世間を震撼させるのに十分な威力を持っていた。

気付けば小さな悪、とも呼べるようなものでさえ恐ろしくて行えない雰囲気が出来上がっていたのである。

それ以上に恐ろしいのは、その証拠を揃えた人物はその姿を一切見せることなく、それらを全て行った事であろう。

そうして世間は数年、この静かな平和を恐々としつつ過ごしたのだった。

さて、この話に深く関わるもう一つの話があった。

某皇国の皇太子の下に、他の国同様に官職達の不正を記した書類が届いた時の事。

彼はその書類を最初は流れるように読んでいたのだが、中ほどまで読み進めたと思った瞬間、その動きを止めた。

そして何かに思い巡らせるような様子を見せたかと思うと次の瞬間、彼は顔を真っ青にして書類を再び最初から読み進めていったのである。

家臣の皆は次代の賢帝と称えられている皇太子の常に無い様子に、心配そうに視線を向けた。

彼は長い時間をかけて書類を読み終えた後も、その後じつと動かずそのままの姿勢で10秒ほどはいたそうだ。

そして顔を上げ告げたのはたった一言。

「この書類に載っている人物を全て処断しろ」  
ただそれだけだった。

その言葉に家臣達は皆、常ならばそんな処断を下さないであろう彼の今回のありえないほどの思い切りの良さに皆は驚いた。

「お、お待ちください。さすがにそれは色々と問題が発生するのでもう少しその決定をお待ちいただけませんか？」

「いや、今すぐだ」

そう言いきった彼の顔色はかなり青ざめていたが、はっきりと言いきった。

その姿は常に冷静沈着を以て政治に向き合ってきた彼にはありえないほど動揺していた。

後に近くでそのやり取りを見ていた者達の一人が、そう同僚にこぼしていたそうだ。

さすがにこの何時に無い決断の早さに、いぶかしんだ一人は聞いた。

「最近世情を騒がしている出来事がある事は聞き及んでおります。

よもやまさか我が国にまでその被害が及ぶとは予想だにしておりませんでしたが。ですが一つお聞きしたい事がございます。何故にこうも容易くその書類を信ずるに値する物として扱うのですか。よもやまさかとは思いますが、その書類の作成者にお心あたりがおりでしょうか？」

その問いに、彼は何かを考えるように目を閉じ、そして静かに聞き返した。

「……ある、と言ったらどうする？」

そのあまりにも真剣な表情に「いえ。出すぎた事を……」と言って、彼らもそれ以上問い詰める事はしなかった。これ以上追求してはならない雰囲気を感じたからだ。

会議を終わらせて部屋に戻った皇太子は、深い深いため息を一つ吐いた。

皇太子はあの場でそれ以上は何も語らなかった。と言うか語れなかった、と言うのが本音だろう。

かつての知り合いの一人から聞いていたのだ。

勇者に起こった悲劇とその後の暴走劇。

まったく何も知らない他人が聞けばただ笑い話になるような話しだったが、実際目の前に証拠を突きつけられたら信じないわけにはいかなかった。

あの書類。文字を幾分かいじっていたためにすぐには誰の文字か分からなかったが、読み進めるうちに気付いたのだ。

あの証拠書類を書いた犯人が勇者である、と。

彼の現在の状況はさっぱり分からないのだが、無節操に暗躍して各国の黒い部分を風潰しにつぶしまくっている事は確かのようにだっ



た。

「まったく……ん？」

椅子に座り考えをめぐらせていたとき、机の上に一枚の紙が置かれていた事に気付いた。何気なくその紙を取り、そして固まった。

「ど、どこで見てたんだ!？」

あたりを見回すも他人の気配は一切しなかった。

その紙には、決断早かったな、とたった一言。

それを読んだ彼はただ乾いた笑いを上げつつ、会議の時に読んだ書類の最後の部分にあった一言を思い出していた。

こんな人事はどうだい？

そんなことを書いて何人かの名前が上げられていたが、あれは彼なりの優しさなのだろうか、と首を捻った。そしてそれは、側近が呼びに来るまで続けられていたそうだ。

## 勇者の黒いページ（後書き）

……突貫工事のように書き上げたので、後日変更は絶対します。

頑張れ、息子達（前書き）

息子達の悪巧み（？）なお話。  
不発に終わってますが……

## 頑張れ、息子達

「さて。第486回、家族会議を始めます」

その声に苦笑しながら応じるもの、そしておお、と威勢良く返事をするもの、反応は様々だったが声を発した人物はそんな事を気にした風も無く、話を続けた。

「さて、今回の議題は……」

「そんなもつたいぶつた言い方をせずとも、いつもと同じだろ。あのくそ親父をどう叩きのめすかだ」

その声にそうだそうだと同意する声。

息巻く年若い三人を、そばで見つめる一回り年代の違う三人は苦笑と共に見つめていた。

「何であそこまで父さんを敵視するんだろうね」

「気持ちは分からなくは無いが……」

「だがあの父親を敵に回そうなんて怖いもの知らずな……」

そんな年長三人組の眩きを、一人が聞きつけた。

「怖い物知らずってどういう意味だ？」

「あ、聞こえた？」

「あのなあ。聞こえるように話してたとしか思えないんだが」

その言葉に、彼はそういえばそうだな、と笑った。

こんなところはあの親父そっくりだ、と思っていたがあえていかなかった。当人はその辺を自覚しながら行っている節があったからだ。

「で、どういう意味なんですか、兄さん」

「あー、とその前に一応確認して置くが父さんがかつて魔王を討つた勇者だった、って話は知っているよな」

その言葉に、三人が三人とも不満そうに「知っている」と答えた。

そもそもあの父親が気に入らない一番の原因は、その『勇者』という事だった。

かつて魔王を討った勇者。

それは強大な力を持ち、そして魔王を打ち倒したといわれる皆があこがれる存在。

現在では学校の教科書にもその勇士は称えられているのだが、その憧れの存在があの出鱈目な存在とは認めたくなかったからだ。そもそも名前も違う。ついでに言えば、某学校には勇者の肖像画なるものが飾られているのだが、その絵の人物ともまったく違うのだ。

おまけに、すっかり間違えると自分の兄弟と間違うほどの若さを保ったままの出鱈目存在だ。

ついでに言えば、彼の出鱈目教育のせいで世間一般に初めて出た時、世間と自分の一般常識の幅広い差にショックを受けた思い出も一役買っていた。

いや、基準オーバーな教育のおかげで現在色々と役に立っている部分はあるのだが、それは彼らの中では別問題なのである。

「で、ここからが本題だ。お前達は学校でしっかりと習ってきたと思うが、ジヴラ山の事を知っているか？」

何の関係も無いような話だったが、彼らは真面目に記憶を掘り起こす。

「ああ。確か景観がすばらしいといわれた山だったんだよな。今はキレイさっぱり無いけど」

「そう言えば突然その姿を消した、とかいわれてたよな。その後、

平地になった場所に立派な街が出来たって。そういやその街の名産に、確かものすごく美味しい酒があるって聞いた事があるな」

「あの山には貴重な薬草があったのにく〜！って叫んでる研究者を見かけた事があつたぞ。今は別流通で以前よりは安価に手にはいるから、そういう声は減ってきているって聞いた事があるな」

「よろしい。それだけの認識があれば十分だ」

その言葉に揃って首を傾げた。

「どういう意味なんだ？」

「あの山の消滅に関わっているのが父さんなんだ」

「「「は!?!?」「」」

茫然自失とはこのことだろう。3人はその言葉を聞いて立ち尽くしてしまっていた。

「いやー、あの一件はもうすごい騒動だったな」

「母さんもあの一件は仕方の無い事とは思っけどやりすぎよ、って言っていたからな。相当激しいものだったんだろうね。私達は8歳ぐらいだったけ？」

「あ、自分は9歳になった頃だよ」

「私は10歳の誕生日を越えた頃だったね。あの記憶は鮮やか過ぎてなかなか忘れられないよ」

ほのぼの、といった感じで会話を交わす一回り年上の兄達の姿に、弟一同は口を挟めず、ただその内容に耳を傾けていた。

「詳しい話を聞いたわけじゃないからはっきりとは言えないんだけどね。でも一応話を聞いた限りだと、まあ、その……」

言いよどむ二人目の兄の言葉をさえぎるように、三番目の兄が言った。

「確かに言いにくいよな。あの山を消滅させたのが八つ当たりだなんてな」

「や、八つ当たり!？」

「八つ当たりで消滅させるなんて出来るのかよ」

「ちょ、ちよつと待ってくれ」

「ん?なんだい」

「あの山には貴重な薬草があつたんだろ。それも丸ごと消滅させたつて事なのかよ」

「ああ、それが」

「ははは……。それなあ……」

そう言つてどこか遠い目をする次兄とその下の兄。長兄の方を振り返ると、彼もまた視線が微妙に泳いでいた。

「え?まだ、何か……あるのか?」

「あ、あれはね。えーと……。うん。これははつきり言つておいた方がいいだろう」

「いいのか?」

「兄弟に隠し事をするなんておかしいだろ」

そう言つて振り返つた長兄は満面の笑みだった。あまりのさわやか過ぎる笑顔に、彼のその真意を二人は悟る。絶対道連れのもりだ。だが確かにこれほどまでに極悪な現実を共有するに限るだろう。

「という訳で、はつきり言おう」

その言葉の続きを待つ。

「……この家の裏の崖下に群生しているよ」

……………。

一同沈黙。

「冗談だよな、兄ちゃん」

「冗談だったらどれほど良かったか」

末っ子の言葉に三男はしみじみ返す。

「裏つてあの時折謎の突風吹き荒れるあの裏か？」

「あの突風の結界を抜けた下に群生しているよ」

末っ子から2番目の言葉に次男は軽く返した。

「群生つてどういう意味だ!？」

「あの薬草の束を10束作ってもまだ有り余るぐらい、かな」

4番目の弟の言葉に長男は頭の中で計算しながら答えた。

.....

下の弟三人組は呆然と、上の兄三人組はやっぱりな、と苦笑い。

話しの中の薬草が貴重と言われるのには訳があった。

群生している、と言われていたジヴラ山でさえ束なんてものを3つ作ったら限界、と言うほどの規模で群生していたと言われていたのである。さらに言えばあの山は危険なため、その付加価値は莫大なものとなっていた。だが危険を超えて取ってくる価値はあるものなのである。いくつか確保すればしばらく遊んで暮らせるだけの金が手に入るからだ。

「以前から非常に気になっていたんだが、あの親父の資金は……それから出てるのか？」

「あー、うん。それもある」

どこまでも歯切れの悪い言葉に、あの父親についてまだ何かある事は三人とも嫌でも気付いた。

「おい。俺、これ以上聞きたくないんだけど」

「今聞いておかないと後々まで後悔する気がする」

半ば泣きの入った末っ子二人の言葉を無視し、四男は勇気を振り絞って聞いた。

「あの親父の事で、まだ聞いておかなきゃいけないことは……何だ」



「……本当にそれを聞く覚悟はあるのか？」

長兄の真剣な表情に三人は顔を見合わせ、うなずいた。

「聞かせてくれ」

その言葉に、上の三人はやれやれ、といった感じで視線を合わせた。

なんだかんだと言っているても、やはり彼らも父さんの息子だな。

覚悟を決めた表情がそっくりだよ。

そんなことを考えながら、口を開いた。

「とりあえず、絶対口外しないことを約束してくれ」

その言葉に、戸惑いながらも頷く三人。

「じゃあ話すぞ。父さんは………」

……。

話を一通り聞き終わった後、一つの教訓を得た兄弟達は家訓を一つ残した。

父親の所業は、後に続く弟達にはしばらく内緒にしておこう。

その真意は唯一つ。

自分達と同じ思いを抱いてもらうためだけに。

もっとはつきり言うならば、自分達だけそんな貧乏くじを引くの

は嫌だった。

それだけの話である。

そうしてまた一つ、兄弟達の家訓は増えていったのだった。

魔王の苦手（前書き）

うーん。予定と大幅に違う……

## 魔王の苦手

私は何にも動ずる事は無い、と言われていた。

冷静沈着。

そう評されるにふさわしい行動を見せていたから。

それはかつて、何かに動ずる姿は王にはふさわしくない行動だ、と誰かに言われたからだ。

だが私には現在、ものすごく苦手な存在がある。

表情に出すことなく、今にも逃げ出したい気持ちを抑えて対面した相手。

私は、本気で、苦手なのだ。

あの、ガッシュガルだけは。

「ご機嫌麗しゆう、我が敬愛する陛下」  
何故か熱い視線で見つめられる。

「ごめんなさい。逃げて良いですか、と視線で横に立つメティアに  
問いかける。

が速攻、小さく首を横に振られダメだしされた。

視線が『我慢してください』とはっきり言っている。

今にも逃げ出したい思いを隠しつつ、頑張っつて対応を続けた。

私が魔王としてこの玉座に座してから、どれほどの時が過ぎたか。

様々な魔族と接してきたが、これほどまでに苦手と思うような相  
手はいなかった。

いつもいつも対面するたびに、何故か私に熱い視線を送ってくる  
のだ。さっぱり意味が分からない。さらに言えば、対面するたびに  
何故か私の背筋を這う汗が大量に発生するのだ。さらに意味不明で  
ある。

考えても頭を捻つても答えは出なかったもので、以前メティアにそ  
れとなく聞いてみた。

ヤツのあの視線の意味を。

そしたら視線をそらされ、さあ、と一言。

あれは知っていた。知っつていて言おうとしなかったのだ。

私は必死の思いで質問をしたのに、行動で拒否された。

などというやり取りがあったのを思い出しながら、勇者についての報告を聞き続けた。

私は現在、彼に『勇者を、敵対すると見せかけて鍛えよう作戦』を執行してもらっている最中なのだ。

本来であれば自分がこっそり出向いて云々という事もしたかったのだが、現在絶賛呪われ真っ最中のせいでこの城からは一步も出れない状態なのである。

仕方ないので信頼の置ける者達に色々頼んで、勇者達を鍛え最終的にはここまでたどり着けるぐらいの実力を付けさせ、そして導いて貰っていた。

私には現在、表の守護と裏の守護がいる。

意味不明だろうから簡単に説明すると、現在幅を利かせている表の守護者達は人間の殲滅派。全てを滅ぼし全てを支配する。その理念の下あちこちで街や王国に魔物たちを向かわせている。

こちらに関しては、私の守護者、と銘打っているが実質はまったく違う。権力を握っているのは宰相のアヴィドだ。私の役割はただ玉座に座して力を供給するだけ。

逆に裏の守護とは、現在目の前にいるガシユガルやメティアだ。他にも幾人かいるのだが、彼らには裏で色々動いてもらっている。表と裏の守護する者達との実力差だけでいえば、メティアたちに軍配が上がるだろう。だがアヴィドには従う配下が数多くいる。

………望む望まざるに関わらず、従う者達が。

一言で魔の領域、と言ってもここは広大な場所だ。住むものの考

えもそれぞれ。アヴィドの考えに賛同の意を示さなかった一族もいくつかあった。アヴィドはそういった同胞にも容赦はしなかった。だからメティアたちに、出来る限りそういった者達の護衛を頼んでいたのだ。

そして

そんな彼らが、私の事を純粹に思ってくれているのは理解している。思ってくれているからこそ力を貸してくれている。それを知っていても私は、この計画を止めようとは思っていない。

勇者と戦った後こうして帰ってきて報告をもらっているのだが、その内容を聞く限り彼は順調に成長をしているようだ。最初のころはまったく太刀打ち出来なかったガシユガルを、今では撃退出来るほどの實力を持つほどになったという。仲間の存在のおかげもあるのだろうが、それでも確かに勇者は力をつけていた。もともと素質はあったのだから当然の事だろう。

「順調に成長を続けているようだ。良かった」

ほっとしたように言うと、その発言にヤツは目を光らせたが、私はそのことには気付かなかった。

「陛下。窺いたい事があるのですが……」

「何だ？」

「勇者のために何故ここまで手を掛けるのですか？」

率直にそう問われて、逆に慌てた。どう答えよう。

？「私を倒してもらったために強くなってもらいたいのだ」

うーん。ここまでストレートに言ったら、即座に勇者を殺しに行きかねない。

？「強い勇者と戦ってみたいのだ」

微妙。それならば急ぐ必要は無いのでは、と問い返されたらアウトだし。

？「なんとなく」

まったく以て答えになっていないところが素晴らしい！

表情を変えることなくどう答えようかと必死に考えをめぐらせていると、ガシユガルが何かをつぶやいたような気がした。

「何か言ったか？」

「いえ。それほどまでに勇者を気にかけるのは、何かを期待されておられるからでしょうか？」

さすがにこの言葉にはドキツとした。だがまだ計画は始まったばかりなのである。こんなところで叩き折られるのは好ましく無い状況だ。

「何故にそんな事を思ったのだ？」

疑問に疑問を返すのは卑怯だと思いつつも、それでも何とかいい答えを考え出すための時間稼ぎには必要な事だった。

「あまりにも突然の事だったからです。陛下がこんな事を言い出したのは。我らとしてもアヴィドの横行は目に余る物と捉えておりますが、それは陛下自信が動けば解決できる事でしょう。何故……」

「私がここから動けないと分かっているそれを言うか？」

その一言に、ガシユガルは痛ましそうに顔をしかめた。

それを見て私は、逆に良心の呵責に苛まれる。本来ならば私も自分自身でこの事態を解決しようと思えば出来た。だが、もうそれにも何の感心も無かったのだ。

それら全てに、何の意味も見出せなくなっていたから。

「それにこの城の中での私は、玉座のお飾り程度の認識だ。今更そんなの口出しされても誰も享受の意を示さないだろう」

ガシユガルは顔をしかめ、メティアは目を閉じた。その言葉どお



りだという事は、彼ら自身分かっていたからだ。

「それに、彼らはあまりにも人側も魔物たちも、そしてそれ以外の多くのものをも傷つけすぎた。今更私達がこの問題を解決させたところで、どうこうなるという時期を大きく逸脱してしまった。それに、既に女神に勇者は見出され旅立った。時期を逸してしまったのだ。もう遅いのだ」

静かに語られた言葉に、二人はうなだれていた。というか、激しく落ち込んだと言った方が正しいだろうか。

事実をそのまま言っただけで、さすがにここまで落ち込まれるとは思ってもいなかったから、逆に私が非常に焦った。

「い、いや。お前達を責めているわけでもなんでもないのだ。ただこれ以上被害が広がらない事が私の今現在の最大の望みであって……（ああ、さらに暗くなった。えーと、えーと）……。お前達を信頼していないとかそんな事はまったく無いのだぞ。むしろこんな私の力になってくれてる事に感謝しているのだ」

最後の言葉によやく顔を上げた二人は、少し暗い顔をしていたが先ほどまで背負っていた暗い影はもう見えなかった。

その事にほっとしたが、まだ気を緩めるには早かったようだ。

「その信頼には最大限応えようとは思っております。ですが、まだ質問には答えてもらってはおりません」

……誤魔化されなかったか。

「ああ、いや。ええと、何だったかな……（どうしよう）……」

「何故にそこまで勇者を気にかけるか、ということですよ」

そのとき、とっさに頭にひらめく言葉があった。

「女神の祝福も受けたのだ。そんな人物が何らかの行動を起こしてくれれば、アヴィド達もそちらに視線を向けてくれるだろう。そうすればこちらとしても何かと行動が起こしやすくなってくる。そう言う意味では期待しているのだ」

「期待、しておられる……のですか」

どこか呆然とした様子のがシユガルに、逆にメティアはやっぱり

った的な表情で自らの主を見つめた。

そして当の本人はガシュガルの様子を見て、この答えではどうやらいけなかったのかと思い、改めて言いなおした。

「彼の芳しい成長ぶりには、近くで見ているお前にも分かるように大いに期待出来るだろ。それにあれだけの実力を兼ね備えてくれたのなら、アヴィドたちの餌としては願っても無いことだ」

その言葉に全てが納得いかないまでも、どこか安心したようだ。

そんな彼の様子に、ホツとしたついでについてポロツと本音が漏れてしまっていた。

「彼らの成長振り（を見学するのは楽しみだし、勇者の成長振りは（私の計画を実行してくれる意味合いで）頼もしいよ」

その言葉を言った瞬間メティアに焦ったように視線を向けられ、はて、と内心首を傾げる。

意味がさっぱり分からなかった。

逆にガシュガルは無表情で。

「そ、そうですね。……ならば、全力で………」

後の方はあまりにも小声だったために聞こえなかった。

何故か不吉な笑みを浮かべるガシュガルに、内心でさらに首を傾げる。

そんな二人を見つめるメティアは、額に手を当て深いため息をつ。

その後、勇者に対するガシュガルの猛追は、筆舌に尽くしがたい

ものとなった。

メティアはそんな彼らを見て、合掌したとかしないとか。

## 魔王の苦手（後書き）

考えてみれば、一切分かっている魔王を絡めて話を進めて行けばこうなる事は仕方の無い事を、今悟りました。

ここで一つ補足。

ガシユガルは究極の魔王ラブです。そして魔王が勇者にラブと勘違い(?)しています。

**料理は美味しいものが一番（前書き）**

本編12話の料理話から発展したお話です。

## 料理は美味しいものが一番

それは一般的でありふれた理由だった。

彼女が付いてきた理由。

それはよく聞くようなありふれた理由。

助けてくれた男に惚れたから。

そんなお話でもよく語られるようなありふれた理由で、彼女は俺達の旅に付いて来た。

その助けた相手が元暗殺者だったとか、それも勇者である俺を殺しに来ていた相手だったとか、その対象に何気に彼女も含まれていたとか、旅の途中で振り返り討ちにして無理矢理仲間に取り入れた相手だったとか。

前後した過程は他にも色々あるが、そんな事は彼女にとって重要では無かった。

一番重要なのは自分を助けてくれた相手。そして一目ぼれした相手。

それに尽きたのだろう。

「で、今回はどういった料理なのか……………な」  
思わず引きつる顔。

他のメンバーの顔も同じように引きつった表情をしていた。  
彼女の料理には毎度驚かされる。

と言うか、はっきり言って殺される。魔物に倒される前に、仲間  
に殺される。

皆一同、彼女の料理だけは避けて通りたいたいと思っていた。

好いた男のため、という理由は立派である。

向上心のための素晴らしい原動力である。

だが残念な事に、結果がまったく逆になっているのが報われない  
ところだ。

初期の彼女は、まったく料理と言うものを知らないお嬢様だった。  
初めて料理というものをしたとき、雑草から毒草や薬草と、草の  
名の付くもの全てが放り込まれたスープを作成してくれていた。  
あれはもう伝説にしてもいい程の阿鼻叫喚な出来事だった。

だが現在、その伝説を覆すほどのモノが目の前に存在している。

真っ白の液体。

見た目はシチューのようにも見える。

だが。しかし。そこまでだった。普通なのは！！

何故か鍋から漂ってくるのは、酸っぱい匂い。  
そんな匂いの充満している場所のはずなのに、何故彼女だけは普  
通にしていられるのだろうか。  
たぶん料理をしていたから、鼻が慣れてしまったせいだろうと思  
うのだが……。

この匂いだけで涙がこぼれそうになる。  
と言うか、もう色々アウトだろ。

森の奥から帰ってきた仲間達も、この惨劇の舞台に涙目になっ  
ているものもいる。

臭いか状況か。おそらく両方だろうが。

「こ、今度はどんな料理が……用意、されて………」  
そう言って一人倒れた。

合掌。

………なんて事もあった。

あれも思いたしたくない出来事の一つだ。

他にもあったなあ。

口に含んだ瞬間、胃から逆流する感じを覚えたスープ。

普通、スープは飲み込む物である。

見た目は普通のありふれたスープのようだった。臭いも普通だっ  
たように思う。



だが口に含んだ瞬間、体が飲み込む事を拒むかのように逆に胃酸が逆流してくる感覚が。

視線を周りに向けると、他の皆も同じなのか真っ青な顔色で、必死に何かに耐えるような素振りをしていた。

「どうですか？」

一人だけじつと元気に待つ彼女だったが、今、口を開けば確実に吐く。

他の皆と視線が合い一つ頷くと、皆全力でその場から四方に散らばって走りだした。

「へ？」

当事者は皆の突然の行動に、ただ呆然と立っていた。

……………といった事もあった。

もう、どうコメントすればいいのか判断に悩む衝撃的な出来事だったよ。

色々騒動が起こるような旅を続けていたが、その中でも彼女の料理の腕の上達は皆の生死に大きく関わっていた。

皆頑張って料理を教えた。努力はしたんだ。普通の材料を用意し、料理の得意なメンバーがそれぞれ作り方を教えていった。

が、結果は惨憺たるものだった。

もうはつきり「職を間違えていないか？」と言ってやりたくなかった。

その料理内容については、大きく割愛させてもらおう。というか、思い出したら思い出ついでに余計なものまで逆流しそうだったから。

簡単に説明すれば、逆転料理人から恐怖の料理人に進化し、殺人料理人にまで腕を上げた。

魔物に投げつけたら一撃死したのを見た瞬間、皆が恐怖に震えた思い出もあつたなあ。

一番衝撃的な思い出は、あれだな。

魔王を倒し騒動が鎮静化した後、仲間内でパーティを開いた。

仲間達もそれぞれの道を選んで新しく旅立つ前に、名残惜しい気持ちを振り切るためにも一度顔をあわせておこう。そんな軽い気持ちから開催されたパーティは、賑やかで楽しいものになるはずだった。

「あ、私もいくつか料理を作って持って来たんですよ」

にこやかに彼女が言った瞬間、場が凍った。

「……………だ、誰かそれを見たか？」

「いや、俺は知らんぞ」

「俺達が来たときにはもう全部並べられていたのだが……………」

口々に隣り合った者達と囁き合う。情報交換が囁きながらされるが、誰一人としてどれがそうなのか知らないようだった。

「遠慮せずに食べてくださいね」

そんな彼らの様子に気付くことなく、彼女はさらににっこり笑って言った。

どの料理だ、と聞く勇氣のあるものは誰もいなかった。

言った場合、強制的に食さねばならぬ権利が発生するからだ。

数多く並んだ皿の中から、無害な料理を選び取る。

「これがどれほど困難な事か。

初期の彼女の料理の腕であれば、見た目だけですぐに分かった。中期であれば臭いで何とか判断できた。後期はささやかながらも、色や食材が一部おかしい事で気付けた。

だが今回並んだ料理は、どれも美味そうな見た目と臭いで溢れかえっていた。

「さ、遠慮せずに。楽しい食事を始めましょう」

皆は引きつった笑みを浮かべながら各々大皿から料理を少量ずつとりわけ、自分の皿としばし睨み合い。

そして覚悟を決め、一口。

普通に美味しい料理だ。

そう安心していると、バターン、と倒れる音が。

恐る恐る音のする方を振り返ると、あちこちで泡を吹いて倒れている人間が。

.....。

ロシアンルーレットに敗北した者の末路は.....もう、お分かりだろう。

後に、皆は彼女の栄誉を称え、一つの称号を与えた。

『悪意無き暗殺料理人』と。

不名誉名誉はあえて問わず。

はつきりと言えば不名誉に近いが、皆は彼女にぴったりの称号だと頷きあつたのはいい思い出である。

その後、彼女は胃の頑強な旦那を捕まえた。

というか意中の男をようやく捕まえることに成功した。

ヤツも前職が毒も扱うような仕事だったので毒の耐性は大いにあつたはずなのだが、彼女の料理だけは何度かに1回は確実に気付け料理を食さねばならない事態に陥っているそうだ。

そんな日常を送っていたとしても、幸せならばそれでいいのだ。

死ななければ……………それで、いいのだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6051x/>

---

『魔王と勇者』のその前は.....

2011年12月10日02時45分発行